● わかるところまで「さかのぼり学習」

順心の“魔術”の３つめは、帰国生の「理解が不十分なところ」「練習量が足らなかったところ」などを、小学校低学年のレベルまで遡ってやり直すことです。とりわけ５～７歳の時期を海外で育った生徒は、何らかの“課題”を残したまま帰国してきますので、これは避けて通れません。

例えば、足し算の桁の繰り上がりや数の概念がわかっていないため、算数・数学を丸暗記でこなしてきている生徒もいます。分数や比率がよく理解できていない生徒もいます。本人の努力で、中学３年の内容くらいまでは何とかごまかせても、高校の数学には歯が立ちません。それらの“つまづき”を見つけ出し、丹念に解決していけば、急激に学力が伸び始めるものです。

しかし、この「当たり前のこと」をやるには、本人も教師にも勇気が必要です。本人は「そんなことは知っている／できる」と思い込んでいるのが普通ですし、教師を信頼していないと付き合ってくれません。教師の側も、個別メニューを組んだり教材を用意したりする手数は、結構な負担となります。また、一人ひとりの学習進捗状況を把握しながら、他の教師と調整・協力していくことも必要です。

この「当たり前のこと」を当たり前のように生徒に納得させ、指導していった結果が、「学力の伸び率が都内一」の評価につながっているのでしょう。回り道のように見えて、実は“最も効率的なやり方”だと、私たちは実感しています。４月から正式に「学習司令センター」が設置され、生徒の個人情報や指導メニューなどを教師全員で共有できるシステムが整います。他校に真似のできない「さかのぼり学習」を支えるシステムの確立です。

［お知らせ］

国際生編入試験（随時）については、26ページをご覧ください。

順心女子学園　中学校・高等学校
〒106-0047 東京都港区南麻布 5-1-14
TEL. 03(3444)7271　FAX. 03(3444)7192
www.junshin.ac.jp

小山　和智
おやま　かずとも
順心女子学園中学・高校　校長補佐

海外子女教育振興財団の外国語保持教室主任のほか、ジャカルタ日本人学校事務長、クアラルンプール日本人学校国際交流ディレクター、啓明学園国際教育センター所長を歴任。
現在は「グローバル化社会の教育研究会」の事務局長としても活躍中。

http://www.toshima.ne.jp/~kyoiku/

英語補習校だより（２）

英語モードに戻る？

毎週土曜日、「英語補習校」に通ってくる子どもたちは、校門を入るとホッとした表情になります。電車を乗り継いで「やっと着いた」という安堵もあるでしょうが、「安心して息が吸える」といった風情なのです。

レッスンが始まって20分間くらい、放心したような表情の子どももいます。とくに帰国後２ヶ月目の“不適応期”には、教師の語りかけにも、うなずくのがやっとという状態です。やがて、少しずつ表情が明るくなってきて、休憩時間には元気に食堂や校庭に飛び出していきます。

どうやら、子どもたちの内面で、“日本語モード”から“英語モード”に切り替えが行われているようです。そこには、単に言葉の違いを越えた、“学校文化”の差異が現れているようにも思います。海外の「日本語補習校」では、どうでしょうか？

週一回、英語で思いっきり話せる友達と会えることの教育的効果は、実に大きいと感じます。まして、小学校で悲しい思いをしたり辛い状況に陥ったりしている場合には、仲間がいるという自信が、前向きに生きる“心の支え”になっているようです。

また、パソコンを使って情報収集したり、レポートをまとめたりする作業を英語でできることにも、教育効果の大きさを感じます。普通の小学校では、アクセスしている英語のサイトが適切かどうかの指導まではできませんから、「パソコンを思う存分使わせてもらえない」ということにもなります。

http://www.toshima.ne.jp/~kyoiku/Eigo-Hoshuko-J.htm

英語補習校の活動のひとこま：熱心なお父さんと

編集長から一言

現地校に比べて、読書指導がほとんどなく、子どもの読書量が極端に少ない日本の学校で、「生徒一人の年間の読書量が平均で50冊以上」は聞いたことがありません。

この驚く実績は、ただ単に司書さんの数ではなく、各クラス・学校全体の工夫や努力の賜物に間違いありません。機会があれば、どんな工夫をされているのかの学校の企業秘密（？）を、報告して貰いたいものです。

その工夫が、海外で子どもを育てるときの日本語での読書にきっと役立つと思いますので。

国際生の獲得にも繋がります。小山先生、よろしくお願いします。